

都市農業振興に係る研修会

北河内地区農委連

北河内地区農業委員会連合会（会長・友田正直交野市農会長）は1月19日、都市農業が有する多面的機能の振興を目的に「令和7年度都市農業振興に係る研修会」を開催し、関係者ら85人が出席した。

当日は、元大阪府立農業大学校長で気象予報士の森田彰郎氏と守口市都市農業研究会会長の木村剛久氏が登壇した。研修会の第1部では、森田氏が「暑くなる大阪とこれからの

農業」と題して講演を行った。

冒頭では、令和7年夏の気候の特徴について解説。西日本の梅雨明けが観測史上最速だったことや、40℃以上の気温が観測された回数について、令和6年までの約40年間の総計が57回であるのに対し、令和7年では1年間で30回に達したなど、近年の異常高温をデータで示した。次に、地表付近の気温が上昇する仕組みについて説明。森田氏は、大気中の二酸化炭素等の

温室効果ガスが温室の被覆材のような役割を果たし、地表から放出される熱を閉じ込めることで気温が上昇すると述べた。

最後に、大阪農業における暑さ対策について解説があった。高温に弱い秋野菜は、発芽期に高温条件になると立ち枯れなどが発生しやすく、品質や収量の低下につながると指摘。対策として、直まき栽培では窒素肥料の施用を控えるなどを挙げた。第2部では、木村氏が「守口大根について」と題して講演。初めに、守口大根とは長さ1メートルを超える世界最長の大

根で、主に「守口漬」として親しまれており、平成19年には「なにわの伝統野菜」の認証を受けた守口市の伝統的な農産物であると説明した。

続いて、市と守口市都市農業研究会の取り組みについて紹介。毎年「守口大根長さコンクール」や、地元の小学生を対象とした収穫体験など、普及啓発活動の内容を報告した。

講演の中で、木村氏は「守口大根を次世代に継承できるように、今後も地域全体で取り組んでいきたい」と語った。（林佑）



参加した委員らは熱心に耳を傾けた

天気のおっちゃんのコラム

気象予報士、元普及指導員

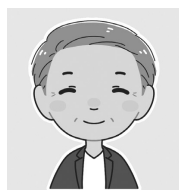
森田 彰郎

第二十三回

「温室効果とは」

温室効果はよく聞くけれど

「温室効果で地球は暑くなっている」とか「二酸化炭素は温室効果ガスだ」という話はよく聞きますが、では、温室効果とは何でしょうか。今回は、温室効果について、解説します。



温室は赤外線放射で暖かい

そもそも温室が暖かいのはなぜでしょう。冷風が入らないから？ でも、家の中も窓を閉めれば風は入りませんが、温室の方が暖かいですね。日光が当たるから？ 勿論そうですが、それだけでは正解とはいえません。日光には様々な波長の光が含

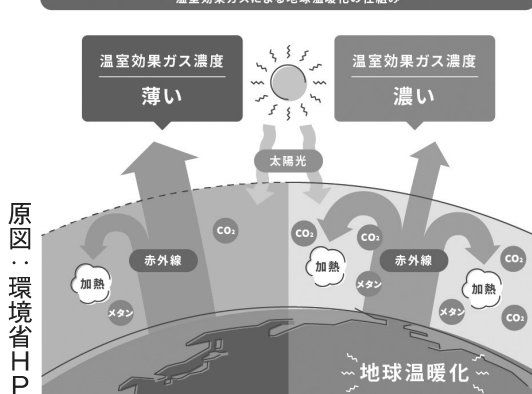
まれています。その中で可視光線（虹の7色の光）は、大気にはほとんど吸収されずに地表に到達します。このエネルギーは地上の物体に吸収されると赤外線に変わり、再度大気に放出されます（放射といいます）。

赤外線には物質を細かく振動させ、熱を持たせる性質があります。地上からの赤外線は、温室のガラスやフィルムを振動させ、熱を持たせて、再び地表へと放射します。それを繰り返すことで、温室は暖まるのです。

温室効果ガスが赤外線を放射

地球の温室効果では、特定の

温室効果ガスによる地球温暖化の仕組み



原図：環境省HP

種類のガスが赤外線を吸収し、再度放射します（図参照）。単位面積あたりの放射量は、ガラ

スに比べれば遙かに少ないのですが、地球レベルでは、気温を上げる大きな要因と言われます。温室効果ガスとしては二酸化炭素が有名ですが、ほかに水蒸気やメタンガスなどが知られています。農業分野でも、二酸化炭素やメタンを減らす取り組みが、今求められています。

ワンポイント農業気象

(2月)

冬型気圧配置による降雪と凍結（特に山間部）
南岸低気圧による降雪（平
坦部も要注意）